

# 朝鮮官人、倭城を語る

## 倭人、城を築く④

韓国における朝鮮時代の城郭を研究するうえで不可欠な文献が『華城城役儀軌』です。これは18世紀末、京畿道の水原（スウォン）に華城（ファソン）が築かれますが、その築城に関わる公式記録の集大成ともいべき史料で、そのうえ華城完成後間もない時期に編纂されたこともあって、一次史料として価値も非常に高いと評価されています。『華城城役儀軌』は巻首と附編を入れて全10巻からなり、19世紀初め頃に活版で印刷（図説は木版）されて、各方面に配布されました。

華城そのものは、日帝時代の水害や1950年代の韓国戦争によって破壊されて、一部の建造物を残すだけでしたが、1970年代頃より朴正熙大統領が大韓民国の経済発展に歩調を合わせるかのように復元・整備を進めたとのことです。そんな破壊状態だった華城の復元が可能になったのは、『華城城役儀軌』に詳細な図面が収載されていたからです。おそらく『華城城役儀軌』が無かったなら、華城が世界遺産に登録されることもなかったことでしょう。

姫路城も華城と同じ世界遺産ではありますが、これだけまとまった城郭の工事に関する文献史料は姫路城に関しては残っていません。オリジナルな建物の残存度合では姫路城に分がありますが、人や物の動きを切り口として城を描くとなると、華城のほうに分があると言えるでしょう。姫路城を紹介するソフトがどれも似たり寄ったりになってしまう要因は、どうもそこらへんにあるようにも思われます。

さて、城郭研究室には『華城城役儀軌』コピー版の抄本があります。華城の施設を描いた図を載せる部分（図説）だけのものです。これは前述のように、『華城城役儀軌』は10巻からなる大部なものなので、華城の案内に必要な部分だけを抄出して便宜的に作られたものです。華城の復元はこの図をもとにしているのも、もちろんこの部分だけでも重要なことは言うまでもありません。しかし、『華城城役儀軌』が城郭研究の基礎資料となる所以は、築城までの経緯や完成後の儀式、築城の工程などが詳しくわかる点にあります。

2002年8月、「城踏」No.40で紹介した韓日学術交流会に参加した際、華城研究会から京畿文化財団が発行した『수정국역 화성성역의궤 (修正国訳 華城城役儀軌)』をいただきました。また最近では、個人から奎章閣本のコピー本の寄贈を受けました。これによって『華城城役儀軌』が読みやすくなりました。同時に城郭図だけではなく、『華城城役儀軌』の全体が読めるようになった意味は大きいといえます。とくにコピー本では見開きに4頁が割付けてあるので、読むのには便利な体裁になっています。

韓日学術交流をきっかけに朝鮮時代の城郭について知るようになっただけでなく、貴重な文献を譲り受けましたので、これらをもとに華城について調べるようになりました。その際、この基本的文献から華城を研究するのならば、できるだけ原本に近いものを読むべきなのでしょうが、ハンゲルの勉強になることと、国訳した韓国人研究者の城に対する考え方が反映されていると考えて、奎章閣本のコピー本は使わずにまずは国訳本を読んでみることにしました。通読できるほど語学力も無いので、頁を繰りながら目に付いたところを拾い読みすることから始めました。すると次のような記述に出会いました。巻一「筵説」癸丑十二月八日条で、趙心泰（チョシムテ）と李儒教（イユギョン）が築城について手本となる城（咸鏡北道の鏡城邑城）について述べている部分です。

조심태 (趙心泰) 가 아뢰어 말하기를, “이것이 흙의 모양과 같은 것으로, 경성 (鏡城) 의 성이 대개 이와같사옵니다.” 하였다. 이유경 (李儒教) 이 아뢰어 말하기를, “경성은 신이 아직 보지 못했습니다만 왜성 (倭城) 도 또한 고를다고 하는 것을 들었으며, 이것이 대개 성을 쌓는 좋은 법이라고 하옵니다.” 하였다.

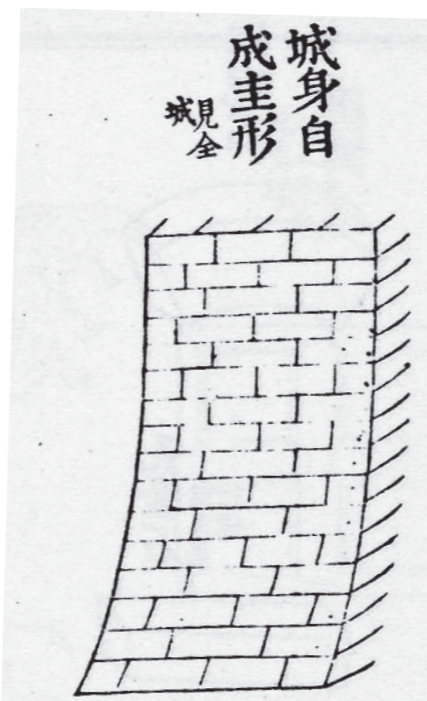
趙心泰は、理想的な城が備えるべき施設や構造を考えたとき、「흙의 모양」もその一つとみているようです。「흙의 모양」は「笏（圭）の模様」で、『華城城役儀軌』では下記の左図を掲載しています。これに対して李儒教は、未実見と前置きしながらも鏡城邑城の城壁が「흙의 모양」であり倭城もそのようになっていると指摘しています。

『華城城役儀軌』が書かれた頃、すでに壬辰丁酉倭乱（朝鮮出兵）から200年がたとうとしているのに、朝鮮官人の言動からは、倭城（日本軍が朝鮮半島南部に築いた日本式城郭）が彼らの記憶からは完全には消えておらず、それどころかいまから築こうとする行宮を守護する城郭の構造に少なからず影響を及ぼそうとしていることが窺えます。

趙心泰は構造として「흙의 모양」に注目していますが、これは姫路城など近世城郭石垣でいうところの「扇の勾配」になります。高石垣を築く際、石垣の孕みを防ぐために設けられた隅角部で顕著に見られる曲線の勾配です。右写真で示しているように、とくに熊本城石垣のそれは有名で、卓越した石垣の構築技術を存分に見ることができます。

加藤清正が朝鮮へ出兵した際に、家臣が石積み技術を獲得してきて熊本城の高石垣を築いたともいわれますが（大類伸・鳥羽正雄『日本城郭史』1936）、趙心泰と李儒教の話だけからすると、彼らの認識では正反対だったようにも受け取れます。華城建設当時、朝鮮では何らかの理由で石積み技術が衰退していたのでしょうか。それとも、戦国時代以来戦争が続いき軍事大国化した日本のほうが、築城技術では近世を通じて朝鮮を凌駕していたということなのでしょうか。

いずれにせよ日韓城郭比較研究はこれからでしょう。



"Shiro Fumi" No.53 The News of Himeji Center for Research into Castles and Fortifications.